視覚障害がある教員による語学授業実践例（2）
― 2022 年から 2023 年

山下　広司

An Additional Report on How a Visually Handicapped Teacher Conducted Classes at the University Level

YAMASHITA Hiroshi

Abstract

This is a report on how a visually handicapped teacher conducted classes at the university level. It follows Yamashita (2023) and focuses on the following two issues that remained unresolved there:

1) how to comment on work done in class, and

2) how to minimize the influence of the Internet in online tests.

key words: e-mail, testing, Internet

0．はじめに

本稿では、山下（2023）において解決できていなかった問題、特に授業中に課題を出し、それをその授業中に添削する際の方法がないという点に関する解決策を提案していく。視力があり、板書させれば読める状態なら、学生に解答例を板書させ、それをその場で添削すればよいだろう。その場でやらせ、添削することにより、翻訳機や辞書の使用を制限したうえで、課題に取り組ませることが可能になる。しかしながら、視力を失った今では、この手法は採用できない。結局、山下（2023）の段階では、作文課題を出した場合などでは、事前に解答（作文）を学生にメールで送らせ、それを掲載したプリントを作成し、それをもとに解説するにとどまっていた。明らかに翻訳機を使用したであろう答案があり、早急に対策を講じる必要があった。

本稿では、板書こそさせないものの、それと同等の効果を持つ方法を提案する。

また、試験においても、問題をプリントで配布し、その解答をタブレットやパソコンで打ち込ませ、メールで送らせる方法を採用しているが、これもインターネット等や翻訳機の使用、他の学生と試験時間中に解答のやり取りをメールでやるなどという不正の温床になる可能性があることも事実である。不正が起きにくい問題の形や試験、採点方法についても紹介していく。

〈キーワード：メール、試験、インターネット〉

1．板書に代わる手法

語学の授業を行う以上、どうしても辞書や翻訳機を使わずに課題をやらせたいこともあるだろう。目が見えていた時は、課題を授業中に出し、解答をノートや黒板に板書させていた。しかしながら、目が見えなくなった現在では、この手法では添削ができない。ノートや黒板に書かれた文字は見えないからである。この問題については、山下（2023）では、解決策を示せてはいなかった。

授業中に課題を出して、その場で答えさせ、それをその場で解説する方法はある。学生に解答を

山梨県立大学　国際政策学部　国際コミュニケーション学科
Department of International Studies and Communications, Faculty of Glocal Policy Management and Communications, Yamanashi Prefectural University

メールで送らせ、それを私が音声パソコンに読み上げさせ、板書するか、プロジェクターで映しだして、解説すれば済む話である。学生から送られてきたメールは、次のように映し出される。

（図1）
題名　：writing3授業内課題提出202XGPXXXXXXX
差出人：XXXX<XXXX-XXX@yamanashi-ken.ac.jp>
宛先　：hiroshi@yamanashi-ken.ac.jp
添付　：メール本文.htm（1.4KB）
受信日時：2023年5月12日（金曜）11時45分

3.

1）B: Look at picture on the wall. The woman stand by him is his wife.

2）B: The amount of gasoline we use are increasing.

（学生の個人情報である名前やメールアドレスがそのまま映ってしまうので、注意が必要である。この部分だけを消す方法はいくつか考えられるが、添付ファイルで送らせ、このファイルを開き、それを映しだせば、アドレス等の情報は入らない。添付ファイルが使えない学生については、図1のようにメール本文に解答を書いて送らせ、その解答の部分だけをワード画面にコピー貼り付けして映せば、アドレスなどの情報は映らない。）

ノートに書いた作文などの添削も、目が見えなければできない。これについても、メールで送らせ、それを音声でパソコンに読み上げさせたのを聞きながら解説すれば、可能になる。

ちなみに、学生に解答を口頭で読み上げさせる方法も考えたが、作文などでは、スペルミスもチェックしたいので、あまり好ましい方法とは言えない。また、作文を口頭で読み上げられても、細かいミスを見落とす可能性が高い。

2．試験

2022年度前期までは、英語Writingの試験は、教室で行う、手で紙に書かせる作文試験と、自宅などでやり、パソコンで送らせる作文の2本立てで行っていたが、後期より教室でやる手書きの作文試験に一本化した。そのおおきなりゆうは、自宅等でやる試験においては、翻訳機などを使用して解答したと思われる答案が見られたからである。翻訳機を使用しなかった学生が不利になることは、避けなければならない。

答案は、学生が手書きしたものを、英語話者に読み上げていただいた録音を聞き、採点した。合わせて、スペルミスがある場合は、その旨伝えていただいた。読み上げてもらうのは、英語話者である必要はなく、英語が読めれば日本人でも十分である。したがって、費用は多額にはならず、研究費で十分賄うことができる。また、試験中は、試験監督をお願いし、学生が辞書やスマホなどを使用していないことを確認していただいた。山下（2023）以来提案している、「助手なしでの授業実践」という観点からすると、試験とはいえ、助手を使用していることは問題のように考えるかもしれない。確かに、厳密に言えば、助手を使用していることは、紛れもない事実である。しかしながら、大学においては、様々な場所で、助手が頻繁に用いられている。試験採点、成績入力、レポート採点などに助手を用いる場合も多い。今回の読み上げ助手の使用も、この範囲内の助手の使用と考えられる。ちなみに、本格的な助手の使用とは、何らかの機能を果たすため、例えば板書助手など、恒常的に授業に参画する者を指すと考える。今回の助手使用は、これには該当しない。

英文法1・2は、従来通り試験問題を紙で配布し、試験時間内にメール本文に貼り付けて送信させた。従来は、試験教室以外での解答も認めていた（パソコン、スマホやタブレットなどの機器を持っていない学生のための措置であった）が、2023年度前期から試験教室以外での解答は原則認めず、試験監督を配置した。持ち込みには制限はないが、インターネットの使用や他の学生との回答のやり取りは禁止されており、これを監督し

ていただくために試験監督をお願いした。インターネットの使用は完全には排除できないが、カラーの画面が表示されている学生は特に怪しいので、注意を払っていただいた。他の学生と解答をやり取りしたか否かは、大体答案を採点している段階で判明する。解答の学生間でのやり取りは、2件の不正行為が判明した。

（インターネットを使用しても答えにくい問題形式の探求）

インターネットの使用防止については、「授業での説明があった個所については、その説明に基づいて説明を展開してください」というように設問を作成し、インターネットでどのように解説されているかは十分調査を行い、自らの説明とは異なる解説がインターネット上では大半を占める事項を設問した。

また、例文を示し、その文法的に誤っている箇所を指摘したうえで修正させ、合わせてなぜ誤りなのかを説明させる問題形式を多用した。採点上は原則的に、間違え個所の指摘、修正、間違っている理由の提示の全てに正解した者にだけ加点した。間違え個所の指摘だけなら、問題文をワープロに入力しさえすれば、緑色の線が付され、分かってしまう。インターネットは便利で、間違えを含む文を入れても、その間違え個所が軽微なら、修正した類似の文が表示されてしまう。したがって、修正までできても、理解できている保証はない。

このように、例文を使用して、（何が問題なのかという）文法的説明をさせることの利点は大きい。具体的な文法用語の説明を求める問題では、その用語をインターネットで調べれば、容易に解答できてしまう。例文の文法的問題点を指摘させる問題なら、文法知識を身に着けていない限り、何を調べればよいかすらわからない。

以下に、2023年度英文法2の試験問題を示す。

（資料1）　2023年度　英文法2　試験問題

1．次の文に言及しながら、英語においてはwh移動が存在することを証明してください。

I wonder what he saw.

2．She has ill since three months ago.が非文法的である理由を説明してください。誤りは、1か所とは限らず、授業での説明があった個所については、その説明に基づいて説明を展開してください。

3．次の文が文法的ではない理由を説明したうえで、修正してください。誤りは、各問題1か所とは限りません。

（1）This is the house which I think that was built during the war.

（2）Tom cane to Japan. Because he wanted see Mt. Fuji.

（3）How tall is he ！

（4）He died for ten years, and he has written three books in his lifetime.

（5）Jane is absent school again today. Being absent for a week, Tom says he will visit her after school today.

（6）Car making in Germany is so popular in here.

（7）A cake was made by her tastes good.

（答案提出方法）

この試験の答案は、メール本文に貼り付ける形で、本日14：40までに、以下のメールアドレスに送信してください。

メールアドレス：hiroshi＠yamanashi-ken.ac.jp

答案の冒頭に学籍番号と氏名を明記してください。試験には、何でも持ち込み可ですが、他の学生と会話やメール等をすること及びインターネット使用は禁止です。また、途中退室はできません。同一学生が2回以上答案を送付した場合は、試験時間内で最後の答案が採点対象になります。

この問題の2において、完了のhaveの後ろにbeenが抜けているが、これは授業で取り上げていないので、日ごろの自分の知識で解答しなければならなかった。since three months agoも誤りであるが、これについては授業でも扱ったので、問題文の指示に従い、それに沿う形で解答しなければならなかった。2022年度後期の英文法1にも、

同様の問題があったが、テキストとして使用している山下（2016）を丸写ししても解答できるので、授業に参加しテキストを精読していれば、解答は容易にできたはずであった。残念ながら、今回設問2に正解できたのは、20名中ほぼ皆無だった。ほとんどが、以下のような、インターネットから得たと思われる解答であった。

（よく見かけるインターネットに掲載されている解説）
?? I have lived in Japan since two years ago.
「私は2年前から日本に住んでいます。」という英作文ですが、これは正しい英文なのでしょうか？sinceはそれが始まった出発点を伴います。2年前two years agoに日本に来たのだから、一見よさそうです。でもagoは現在を起点として過去形に使う言葉。過去を起点とした言葉と現在を起点とした言葉が混在しています。そうなんです。これはよく見るのですが不可です。
（https://studyenglishreal.seesaa.netarticle、2023年9月20日閲覧）

言語現象については、文法的説明だけではなく、意味的な説明や、慣用的に使用されているか否かなど、様々な説明方法が考えられ、どれが正しいということは言えない。しかしながら、この解説について、著者は問題があると考える。ここで、two years agoの代わりに、やはり今を起点として過去のことを表す、例えばlast yearやyesterdayを、sinceの後ろに入れてあげれば、完全に文法的になる。したがって、sinceとagoの、それらが表す時間的な概念の相性の問題で片付けようとする解説には、問題がありそうである。また、次のような文は完全に文法的である。
例文）he moved to America two years ago and has stayed there ever since.
ここでのsinceは、動詞stayにかかる副詞的用法であり、上の解説に出てくるsinceとは用法が異なるが、明らかにtwo years agoとsinceは対をなしている。つまり、sinceとtwo years agoが仲が悪いとは言い切れない。

（本テストで求められている解答例）
・sinceには、接続詞の用法、前置詞の用法、副詞の用法があるが、副詞の用法は、例えばI haven't seen him since.のようにそれ単独、またはever sinceやlong sinceのように成句として使用されることが大半で、「…前以来」という形では使わないので、無視してよいだろう。もしここのsinceが接続詞なら、sinceは節と節を結ぶ接続詞なので、後ろも節になっていなければならないはずだが、そうはなっていない。ここのsinceが前置詞なら、その後ろは名詞句であるはずだが、three months agoは副詞agoを中心要素とする副詞句である。よって、ここのsinceは、いずれの用法にも該当せず、正しくない。for three monthsなどとすべきである。

やはりインターネットが使いにくいと推測される設問1も、正答率は極めて低かった。

3の間違え探しの問題では、間違え箇所の指摘と修正例の提示までは正しくできた学生が多かったが、間違えの理由説明は正答率が極めて低かった。従来の紙の解答用紙に解答させる問題では、間違え個所の指摘と修正例の提示の正解率も極めて低かったので、なぜ間違え個所の指摘と修正例の提示の正解率が上がっているのか、今後調査してみる必要がありそうである。インターネットで、試験問題にある間違った問題文を入れ、類似の正しい文を入手した可能性も排除できない。

本年度の問題ではないが、次のような問題も、インターネット対策には有効である。

問）次の（　　）に文法的に入るものを、1-5の中からすべて選び、その記号を解答用紙に記入してください。入れないものについては、その理由を簡単に述べてください。

The number of students studying in America and Britain（　）.

1. has been increasing two years ago
2. have increased since 2011

3. is increased every year
4. were increasing every year from 1987 to 1999
5. Increased last year

この問題を解くにはまず、主語の名詞句のthe number of students studying in America and Britainの中心の名詞であるnumberがその名詞句の特性を決めること、不可算名詞は単数扱いであること、したがってこの名詞句は単数扱いであること、主語の名詞句が単数扱いなのでそれに合わせて動詞等の形が決められること、現在完了になるか過去形になるかは、時間表現によって区別しなければならないこと、受け身の用法とそれが表す意味を、総合的に判断して解答しなければならない。

このように、インターネットが使える環境で試験をしても、問題を工夫すれば、その影響を最小限にできる。以下に、著者が実践したことを要約する。

1）文法用語の説明を直接的に問う問題ではなく、例文の解説をさせる形で、文法事項の理解度を間接的に問う。
2）授業中にあった説明方法で解答させる。
3）複数の事項の理解を、1つの問題で総合的に問うことにより、調べにくくする。

3．英語Writingの変更点

英語Writingでは、従来は作文を事前にメールで送らせ、その解説を行っていた。2023年度よりこれに加え、英文法のテキストである山下他（2017）を併用している。これは、家でやって提出される作文と、実際の英文法力が大きく乖離していることが判明したためである。家での作文は、調べたりして書くため、間違えが少ないが、実際に理解している事項はそれよりはるかに低いことが、手書きによる（辞書などすべて持ち込み不可の）試験や授業中の突然の質問に対する解答などで、顕著になった。英文法をテキストに従い理屈で理解したのち、練習問題にある作文と間違え探し問題を授業中にやってもらい、それをメールで送らせ、解説を行っている（本論文1節参照）。

4．辞書の使用と綴りなどの確認

語学教員にとって、辞書の使用は不可欠である。インターネットにも辞書はあり、複数の辞書が掲載されているので、便利である。ただ、（画面が見えない以上、音声だけで）綴りを確認するのには、工夫が必要である。もちろん、綴りが正しくなければ、単語を調べることはできないが、問題は、多少の綴りの誤りがあっても、コンピューターが修正してくれて、検索してくれる場合がしばしばあるということである。探している単語が出てきたからといって、自分が入力した綴りが正しいと信じ切ってはいけない。

単語の綴りを辞書で調べるには、私は、例えばinformという単語を調べるなら、ネットリーダーの「検索キーワード」に「inform、辞書」と入力して検索する。好みの辞書を選択すれば、音声で読み上げてくれる。

読み上げは、句読点などの有無は読み上げてくれるが、綴りまでは読み上げてくれない。上で触れたように、探している単語が出てきたからといっても、正しい綴りで検索したとは限らない。綴りを確認するには、その単語をコピーして、ワードか何かに貼り付けし、一字一字読み上げさせ確認している。発音記号の読み上げは難しいが、音声で聞くことができるので、不自由はしない。

5．まとめ

本稿では、主に2022年後期より新たに始めた手法などを中心に、視覚に障害がある方にも便利と思われるものを紹介してきた。特に、試験の作成方法などは、インターネットの影響を、それが使用可能な環境においても最小限にできることから、今後の通常授業におけるAIの使用に関する対策にも、参考になり得ると考える。

参考文献

山下広司（2016）『見ても聞いてもわかるバリアフリー英文法』 大学教育出版.

山下広司、mountford, Peter（2017）『Real Grammar for Creative Communication』 南雲堂.
山下広司（2023）「視覚障害がある教員による語学授業実践例（1）－2021年から2022年」『山梨国際研究』18号pp.75-84, 山梨県立大学.
https://studyenglishreal.seesaa.netarticle（2023年9月20日閲覧）.